

また、来年も来てくださるかしら

山口県 龍泉寺 副住職 岩迫佑都

昨年の夏、お盆のお勤めで九十二歳の一人暮らしのご婦人のお宅に伺いました。お経が終わった後、六〇年以上連れ添った夫を二年前に亡くされたことを話してくださいました。お話の中で特に印象に残ったのは、ご婦人が小さな声で「来年はあっちにおるんかなあ」とつぶやかれた一言です。

目線の先には仏壇があり、ご先祖様の遺影をじっと見つめるご婦人の姿がありました。その姿には夫と別れた悲しみ、ご自分の命がいつ終わるのかという思いが現れているように感じられました。夫との別れは深い絆があっただけに、はかり知れないほどの寂しさと無常の現実を感じさせました。それから10分ほど、遠方に住む息子さんの帰省を楽しみにしていること、家庭菜園の野菜を子どものように思い愛でていることなどを話してくださいました。

帰り際、私が「来年も、また来ますよ。それまで、どうぞお元気で」とお伝えした時、ご婦人は先ほどまでの悲しみや不安の顔とは違う柔らかな笑顔で「また来年も来てくださるかしら。楽しみが、またひ

とつ増えたわ」と言って送り出してくださいました。

お釈迦さまは、すべてが移ろいゆくこの世界を「無常である」とお説きになりました。私たちはこの世に生を受けた瞬間から、すでに老いや死へと向かっています。しかしこの「無常」の教えは、決して悲しみや絶望を強調するものではありません。むしろ、私たちに生きる意味や、今この瞬間を大切にすることを育むための教えなのです。

ご婦人が「また、来年も来てくださるかしら」と笑顔で言われた時、言葉の中に「生きる力」を感じました。別れや喪失の悲しみの渦中にあっても、誰かとのつながりや支えがあることで人は前を向いて生きていくことができるのです。亡き伴侶とのご縁を大切にしながら、ご婦人はこれからも、誰かとの「つながりの中で生きていくこと」を選ばれました。

このご婦人のように『無常』の中でこそ、他者とのご縁や、今この瞬間を生きることに意味があると思う心を持つことは大切なのではないのでしょうか。